

III

薩南の港



(第 12 景) 唐湊より

1 山川



(第7景) 山川湊

- | | | |
|-----------|------------|---------------|
| 1 松林 | 10 帆走する | 19 三角旗 |
| 2 山川村〈地名〉 | 11 湾口 | 20 吹き流し |
| 3 帆船(弁才船) | 12 鳴滝村〈地名〉 | 21 御紋旗 (左巴御紋) |
| 4 小舟 | 13 草葺家屋 | 22 舵 |
| 5 琉球船 | 14 集落 | 23 琉球船 (楷船) |
| 6 道 | 15 通行人 | 24 琉球船 (馬艦船) |
| 7 石灯台 | 16 帆柱 | |
| 8 津口番所 | 17 屋形 | |
| 9 石垣 | 18 下がり | a 山川湊 |
| | | b 開聞嶽 |

山川湊(港)が描かれている。瓢箪に似た形状の天然の良港で、中世から利用され、近世には薩摩藩の外港となった。描かれている和船は、風波から守られている港内では帆を下ろし、外海では帆を上げて航行している。また屋形のある船とない船の2タイプの和船が描かれている。琉球からの船は上り・下りともここで船改めを受けた。那覇-鹿児島を往

来する琉球の公船は楷船と呼ばれた。中国のジャンク式の船で、朝貢のため中国に派遣される船(進貢船・接貢船)として3回ほど使用された後、改修され楷船となり、毎年、春先楷船(秋)・夏立楷船(夏)・夏立小楷船(夏)[運送船ともいう]の3隻が派遣された(全て船身約35メートルの15反帆船である)。また1793(寛政5)年以降、琉球王府の嘆願



により琉球の民間船である馬艦船マーラン（運送船と呼ぶ）2隻（12反帆船）も王府のチャーターにより運行されるようになった [豊見山 2004・2012]。絵図に描かれたやや小型の琉球船は恐らく馬艦船、残りの2隻が楫船であろう。舳先に御紋旗が掲げられているが、中国へ派遣される公船には掲揚しないので、領主の御紋旗を掲げて航行する日本の慣習に従った

のであろう。山川港にはまた中国や朝鮮の漂着船も牽引されて取り調べを受けた（その後、長崎へ回送された）。岬の突端に見える津口番所に石造りの灯台が描かれている。ここは現在番所鼻と呼ばれている。開聞岳かいもんだけは薩摩半島南端にある標高924メートルの火山で、薩摩富士の愛称がある。奄美・琉球一鹿兒島の南海航路の目印であった。（渡辺美季）

2 枕崎

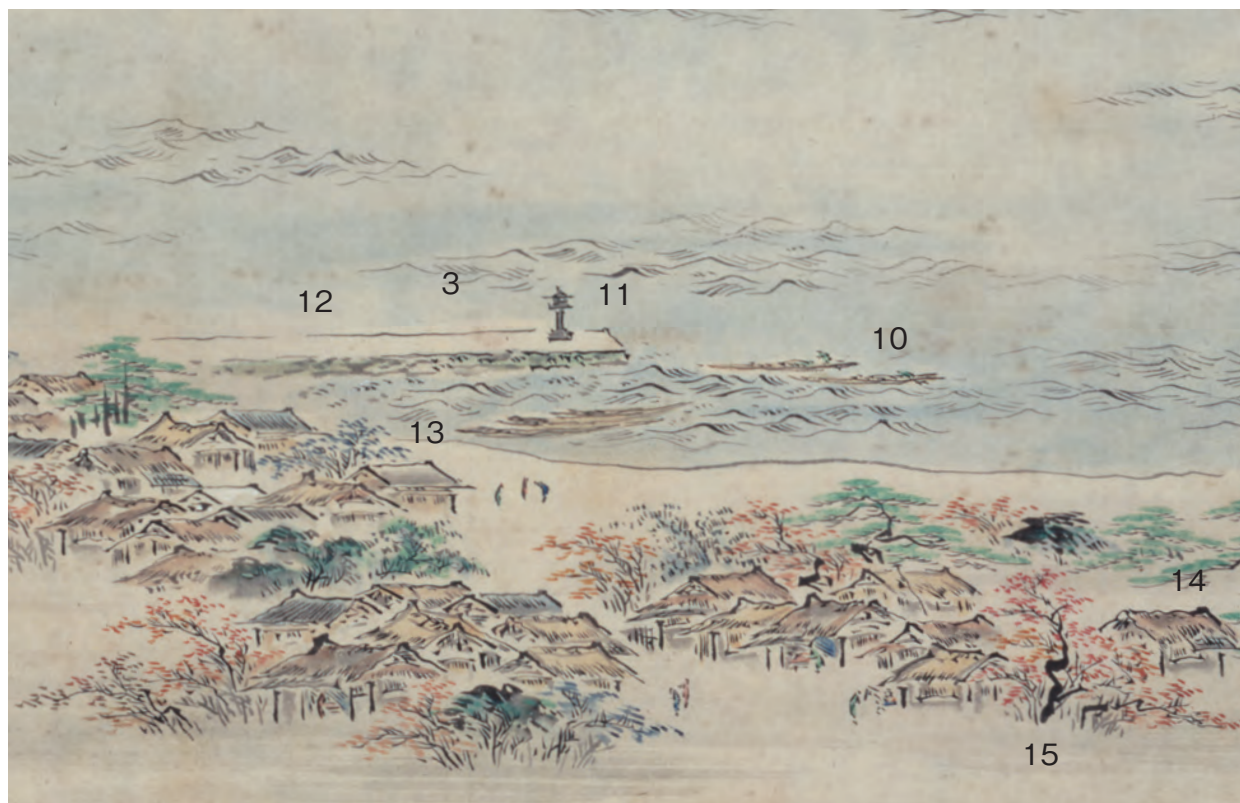


(第11景) 枕崎

- | | | |
|------------------------------------|----------------------------|-------|
| 1 立神山 | 8 追戸 <small>おつと</small> の浜 | 15 櫓? |
| 2 帆船 | 9 集落 | a 枕崎 |
| 3 枕崎 (地名) | 10 小舟 | b 近衛松 |
| 4 千木 | 11 石灯笼 | c 立神巖 |
| 5 松之尾浜 <small>まつのおほま</small> | 12 瀬崎の波止め (ガンギ) | d 硫磺島 |
| 6 松 | 13 板葺家屋 | e 鎮守 |
| 7 小湊川 (花渡川) <small>こみなと けど</small> | 14 草葺家屋 | |

河辺郡鹿籠村かこむらの枕崎浦とその周辺が描かれる。枕崎浦の一部は現在の枕崎市枕崎港である。湾曲した白浜の入り江を松の緑林が囲んでいる。近衛松とは、1594 (文禄3) 年に坊津に配流された近衛信輔のぶすけ (信尹) が、途中この浦の一角にある和田浜の松の下で休息し歌を詠んだとされる場所である。18世紀初頭に紀州から薩摩へ鯉節の本格的な製法が伝えられると、枕崎は鯉魚および鯉節製造で栄えた。港を利用する船が増えたため、1775 (安永4) 年に地

元の石工・神園孫兵衛が瀬崎の鼻から北西へ長さ60間 (約110メートル)・幅10間 (約18メートル)の波止め (ガンギ) を築いた。その内側に複数の船が描かれている。鎮守は、具体的に何を指すのか特定できなかった。海中からそびえる立神巖 (岩) は標高42メートル、向かいの岬・立神山と対をなす枕崎浦の守護神である。沖に活火山の硫黄岳を擁する硫黄島 (薩摩硫黄島) が見えている。(渡辺美季)



3 坊津

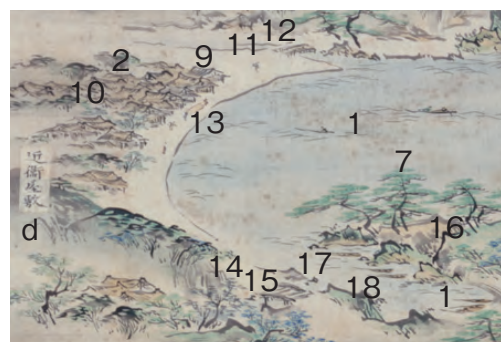


(第12景) 唐湊

- | | | |
|------------------|--------------|--------------|
| 1 小舟 | 14 道 | 27 垣 (朱塗り) |
| 2 茅葺き | 15 橋 | 28 網代浦 |
| 3 寺ヶ崎 (地名) | 16 中島 | 29 網代浜 |
| 4 塔または灯籠 | 17 深浦 | 30 鶴嶋 (鶴ノ島) |
| 5 長瀬 (地名) | 18 舟溜 | 31 栗子島 (黒子島) |
| 6 一乗院の板葺建物? | 19 坊之浜 | a 唐湊 |
| 7 松 | 20 護岸? | b 双剣石 |
| 8 津口番所 (邏所) | 21 帆柱を倒した帆船? | c 祇園社 |
| 9 瓦葺き | 22 帆柱 | d 近衛屋敷 |
| 10 集落 | 23 帆船 | e 一乗院 |
| 11 川 (現、下浜川) | 24 参道 | |
| 12 橋 (現、下浜橋の前身?) | 25 鳥居 | |
| 13 下之浜 (下浜) | 26 鶴ヶ崎 (地名) | |

北方から鳥瞰した坊浦 (唐湊) の図。坊津は、九州の西南端という海上交通上の要衝に位置する要港として知られる。浦の湾奥は、祇園社が建つ鶴ヶ崎とそこから延びる長瀬を境に大きく東西に分かれ、それぞれ下浜と坊之浜の臨海2地区の集落が形成される。坊之浜と下浜には、浦人らとおぼしき人々の姿が描かれ、坊津の浦浜の様子がうかがえる。下浜の東方、深浦は風波の影響を受けにくく、小船の係

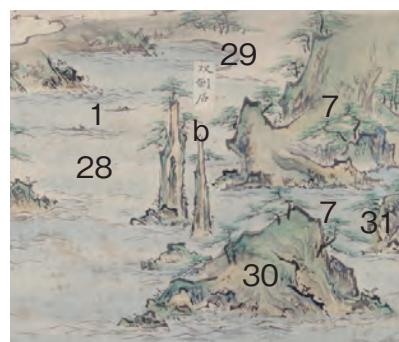
留地として現在も利用されており、本図においても船溜が描かれる。深浦や坊之浜の岸に留められた小舟と異なり、これらの小舟よりも比較的大きい船は、坊之浜の沖に碇泊するかたちで描き分けがなされており、坊津における船舶のサイズに応じた港湾利用のあり方がうかがえる。坊之浜の沖に描かれる船の中で、帆柱が確認できない比較的大きな船は、立て倒し式の帆柱を倒した和船か。深浦に沿う中島は、



部分1



部分2



部分3

1708（宝永5）年に屋久島へ潜入して捕えられたイタリア人宣教師シドッチが一時幽閉された場所である（『三国名勝図会』巻26）。坊浦の北側には津口番所が置かれ、船舶の出入りが管理された。坊浦の湾口の南側付近に所在する網代浦は、好漁場として知られ、本図においても漁船とみられる小舟の姿が描かれる。網代浦付近の海上にそびえ立つ双剣石は、唐人による命名との所伝があり、1856（安政3）年

には歌川広重によって浮世絵シリーズ「六十余州名所図会」の「薩摩 坊ノ浦 双剣石」の画題にも用いられた。画面の左下部分には、薩藩内屈指の有力寺院であった真言宗の「一乗院」や、16世紀末に坊津に配流された近衛信輔の謫居跡「近衛屋敷」の文字がみえる。なお本書34頁から43頁で「茅葺き」とした建物の中には、茅以外の草葺きの建物などが含まれている可能性がある。（橋口亘）

4 泊



(第14景) 泊湊

- 1 集落
- 2 茅葺き
- 3 松
- 4 九玉大明神
- 5 秋月洞 (宮崎秋月)
- 6 大智院
- 7 垣
- 8 門
- 9 島々 (瀬)
- 10 帆走する船
- 11 小舟
- 12 楠崎? (地名)
- 13 泊濱 (泊浜)

a 泊湊



北東方向から鳥瞰した泊湊（泊浦）の図。泊浦は、坊浦に隣接する要港として知られ、坊浦とあわせて「坊泊」の名で合称されることも多く、朝鮮の地誌『海東諸国紀』（1471年刊）所載地図にも「房沾両津」の名が登場する。湾の南岸には、九玉大明神社とその周辺の人家のほか、秋月洞（宮崎秋月）が描かれる。九玉大明神社は猿田彦大神を祀る当邑の惣鎮守、秋月洞は九玉大明神社が建つ宮崎の先端付近にあった洞窟である（『三国名勝図会』巻26）。画面の左下、泊浦の湾奥には、坊津一乗院の末寺であっ

た大智院（『三国名勝図会』巻26）が描かれる。海上には、大小の島（瀬）が描かれており、現在でも松島をはじめ、蒲鉾瀬・双子瀬・山瀬などと呼ばれる大小の島々（瀬）が泊浦から遠望できる。沖の方には2隻の帆船の姿がみえ、湾内には漁船と思しき小舟に乗る人物の姿が描かれる。画面の右側（湾の北岸）には、楠崎等が描かれる。泊浦の湾奥に広がる泊浜では、明代を中心に宋代から清代の中国陶磁等が採集されており〔橋口1998〕、往時の対外貿易港としての歴史を偲ばせている。（橋口巨）

5 久志



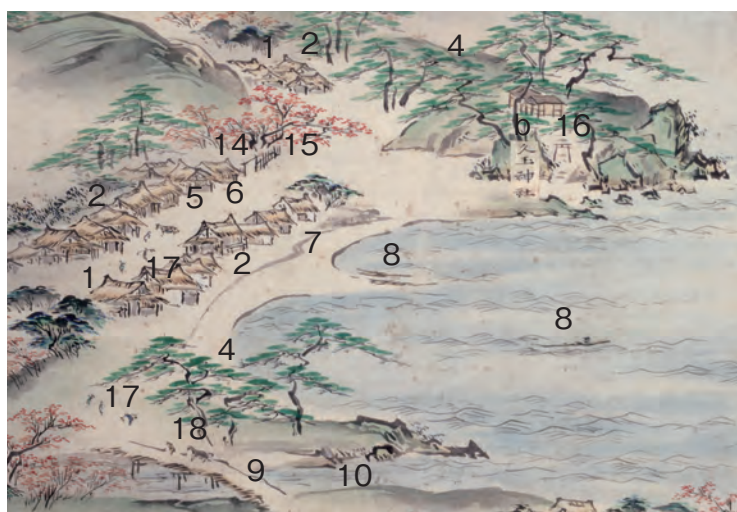
(第 15 景) 久志湊

- | | |
|-----------------|------------|
| 1 集落 | 12 小島 |
| 2 茅葺き | 13 網代 (地名) |
| 3 博多浦 | 14 門 |
| 4 松 | 15 垣 |
| 5 久志麓 (大久志) | 16 鳥居 |
| 6 道 | 17 天秤棒を担ぐ人 |
| 7 護岸? | 18 馬 |
| 8 小舟 | a 久志湊 |
| 9 橋 (現、久志橋の前身?) | b 九玉神社 |
| 10 大久志川 (現、久志川) | |
| 11 今村浜 | |

北方から鳥瞰した久志浦の図。久志浦の北岸には今村浜、東岸には、九玉神社や久志麓 (大久志)、道を往来する人々の姿などが描かれる。久志の麓集落に相当する大久志には、郷士の屋敷などが所在した。画面の奥には、湾の南岸に位置する博多浦や景勝地として知られた小島が描かれる。博多浦には、唐人町が存在したと伝えられ、唐人祠なども残る。

近世の久志では、中村・重・関・入来などの海商家が存在し、その活動範囲は琉球や上方などにまで

及んだ。このうち 18 世紀に活躍した海商・中村宇兵衛は、琉球人女性の思嘉那との間に子をもうけ、これが那覇の士族、宇氏のルーツとなり、その子孫、仲尾次政隆は琉球における浄土真宗の布教活動にその名を残している [伊波 1961、鹿児島県 1940、渡辺美季 2009・2011、知名 2014]。また琉球在番奉行が久志の入来武兵衛の十六反帆船に発給した「進貢船掟」(航海手形) [坊津町郷土誌編纂委員会 1972 : 368-369] などの史料から、進貢貿易で得ら

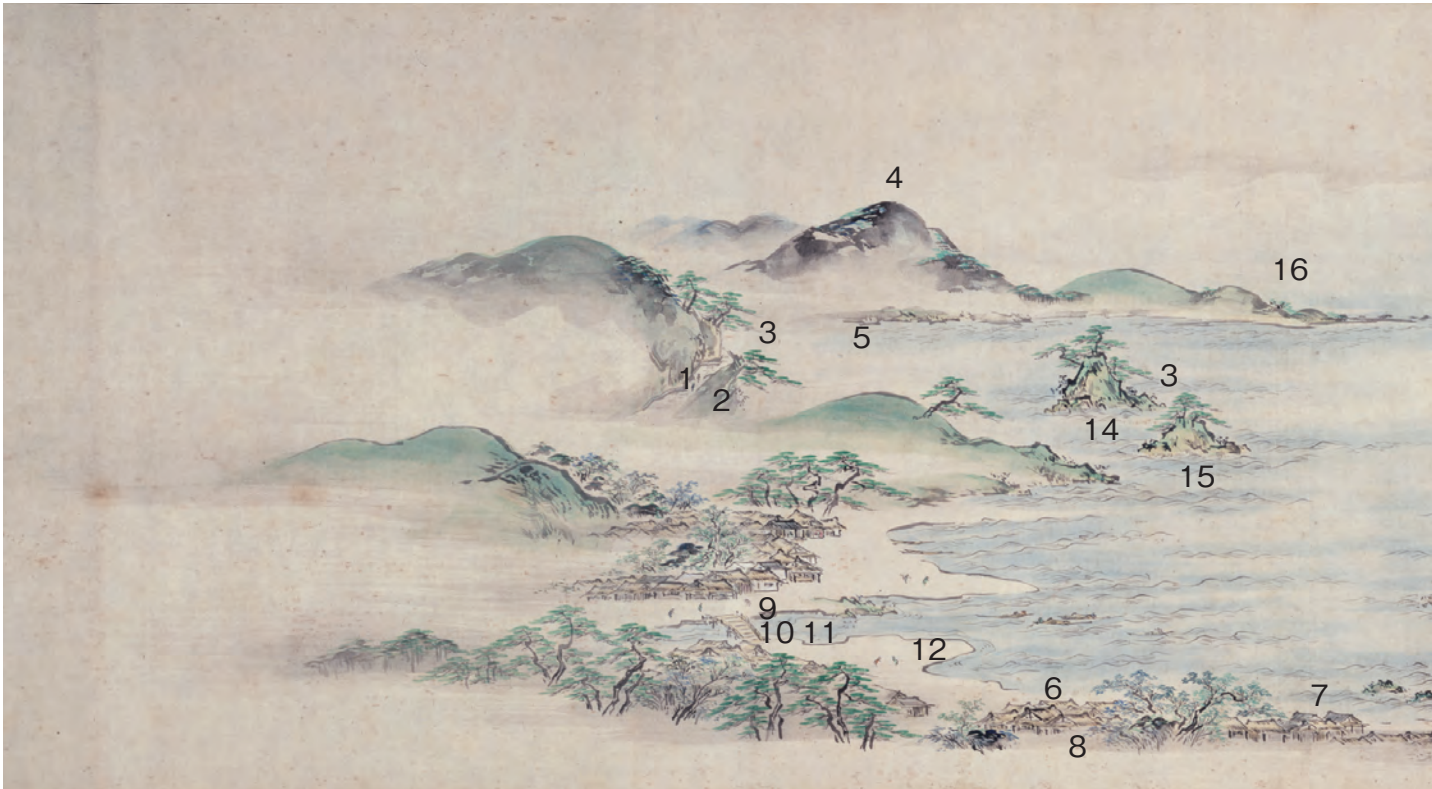


れた唐物の海上運輸に久志の海商が携わっていたことが知られている。このような往時の海商の活動を反映したものか、久志には「交易場」の姓も残る。当図に描かれる久志地域の建物は、そのほとんどが茅葺きとみられるかたちで表現されている。一方、同郷（久志秋目郷）の秋目の図では、茅葺きとみられる建物だけでなく瓦葺きとみられる建物が混在して描かれており、近隣他郷の「唐湊」（坊津）の図や片浦の図でも、茅葺きとみられる建物だけでなく

瓦葺きとみられる建物が描かれている。また、久志の図に描かれた橋は欄干のない簡素な作りであるが、秋目の図に描かれた橋は欄干付きである。このような、描かれた建物やインフラのつくりに見える差異は、当該期の南薩の諸港間における地域性や経済力の差などを反映している可能性が考えられる。

（橋口 亘）

6 秋目



(第16景) 秋目浦

- | | | |
|------------------|---------------|--------------|
| 1 坂道 | 10 欄干 | 19 鳥居 |
| 2 断崖 | 11 清水川（現、秋目川） | 20 素麵崎（正面崎）？ |
| 3 松 | 12 浜 | 21 帆柱 |
| 4 今岳？ | 13 小舟 | 22 帆船 |
| 5 関伽之間（赤之間）？〈地名〉 | 14 大島（大弁さあ） | 23 柵 |
| 6 茅葺き | 15 小島（小弁さあ） | |
| 7 瓦葺き | 16 鶴喰崎 | a 秋目浦 |
| 8 集落 | 17 沖の秋目（蒲葵島） | b 戸柱神社 |
| 9 橋（現、秋目橋の前身？） | 18 蒲葵（枇榔） | |

湾奥北東方向から鳥瞰した秋目浦の図。画面左下には、秋目川周辺に形成された秋目の集落が描かれる。湾内海上に描かれた二つの島（大島と小島）は、現代では大弁さあ（大弁天）と小弁さあ（小弁天）などと呼ばれている。画面の奥手には、好漁場として知られる関伽之間の周辺や今岳と思しき山が描かれる。今岳には今岳拾二所権現社が鎮座し、琉球諸島に往来する人々からも信仰を受けたという（『三国名勝図会』巻27）。

秋目浦の沖に描かれた島、沖の秋目（沖秋目島）には、ピロウ（蒲葵・枇榔）の樹が多く蒲葵島（枇榔島）とも呼ばれ、本図の同島にも多くの枇榔樹が描かれている。同島には戸柱大明神社が鎮座し、か

つて唐土の船舶が座礁の危機に遭った際、この戸柱神の力によって海難を逃れたという所伝がある（『三国名勝図会』巻27）。

画面左端に描かれる断崖上の坂道は、秋目と久志を結ぶ道路に該当する可能性が考えられる。近世当時、秋目－久志間の道のりは険しく、19世紀前半に秋目から久志を陸路で移動した大坂商人・高木善助は、途中経過した難所を道幅「わずか数寸」の細道であったと記している（『薩隅日三州経歴之記事』）。当図には、同郷（久志秋目郷）の久志の図では確認できない瓦葺きとみられる建物の表現が散見され、両地区の地域性や経済力の差などを反映している可能性がある。（橋口亘）

秋目浦
a



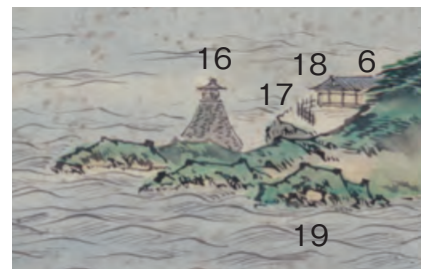
7 片浦



(第17景) 片浦

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 碁石濱 | 12 竹島 (高島・神ノ島) |
| 2 松 | 13 立場島 (立羽島・楯羽島・橋島) |
| 3 集落 | 14 片浦 (地名) |
| 4 茅葺き | 15 護岸? |
| 5 小浦 (地名) | 16 灯台 |
| 6 瓦葺き | 17 垣 |
| 7 帆柱 | 18 津口番所 |
| 8 帆船 | 19 番所鼻 |
| 9 小舟 | 20 天秤棒を担ぐ人? |
| 10 仁王崎 | 21 土蔵 |
| 11 崎之山 | |

a 片浦



部分1

北方海上から鳥瞰した片浦^{かたうら}周辺の図。湾の西北部には片浦の集落、湾奥には小浦や仁王崎、湾外には竹島 (高島・神ノ島) と立場島 (立羽島・楯羽島・橋島) が描かれる。『三国名勝図会』巻27では、港の深さ18尋 (1尋を1.818メートルとして計算すると32.724メートル)、大船数百艘が停泊可能とされ、良港とされる。湾口の西側、番所鼻の付近には、津口番所が置かれ、船舶の出入りが管理されていた。津口番所には勤番が詰め、石火矢2挺、鉄砲3挺、槍、いら棒、刺又などが備えられていた (『加世田名勝志下』)。また、当図の片浦津口番所の建物は瓦葺きで表現されており、加世田郷の地誌類『再撰史二』等の記録と合致する。

近世の片浦には、しばしば唐船が漂着し [前床1991b]、こうした状況を物語るかのように、近世加世田郷の地誌『再撰帳一の二』所載の片浦の図には、唐船 (ジャンク船) らしき船舶の姿がみえる (解題と考察Ⅲ参照)。また、片浦には明代末期に日本へ帰化し代々媽祖神 (福建省起源の航海守護神) を祀るという林家が所在する [宇宿1936]。当図の片浦地区には茅葺きとみられる建物だけではなく瓦葺きとみられる建物が混在して描かれており、瓦葺きとみられる建物の中には蔵とみられる建物も確認できる。一方、湾奥の小浦地区に描かれた建物のほとんどは茅葺きとみられるかたちで表現され、両地区の地域性や経済力の差などを反映している可能性がある。(橋口巨)



部分 2